鳥取臨床心理研究，2023，第 16 巻，29-37
Tottori Clinical Psychology Research and Practice, 2023 Vol.16, 29-37

人はなぜ推しを推すのか？
－ナラティヴからみる推しの存在理由とその機能－

長谷川 千晴・福崎 俊貴
鳥取大学大学院医学系研究科臨床心理学専攻

要約
近年，日本では自身が没頭して応援する対象のことを推しと呼び，推しのために時間やお金を消費したり，あるいは他者に薦めようとしたりといった特徴的な行動をとる文化が広がりを見せている。本研究は，①推しが存在する理由を検討すること，②推しが心理臨床的視点からどのような機能を持っているのかを明らかにすることの 2 点を目的とした。スノーボールサンプリングによって募集した 7 名の研究対象者に対して，半構造化面接を行い，得られたデータをナラティヴ分析におけるテーマ分析を用いて分析した。その結果，①推しによってポジティブな影響を享受していると当人が自覚しているため，人々は推しを推す，②人々は推しを推すことで，それまでとは違う行動を選択するようになる，という 2 つの仮説が見出された。

キー・ワード：推し，テーマ分析，ナラティヴ分析

Ⅰ．問題と目的

近年，日本では自身が没頭して応援する対象のことを「推し」と呼び，「推し」のために時間やお金を消費したり，あるいは他者に薦めようとしたりといった特徴的な行動（「推す」）をとる文化が広がりを見せている。一般的な辞書による推しの定義は未だなされていないが，実用日本語表現辞典（2017）では「人やモノを薦めること，最も評価したい，応援したい対象として挙げること，またはそうした評価の対象となる人やモノなどを意味する表現」とされている。ここ数年で脚光を浴びるようになった「推し」について，心理学的研究および考察もわずかながら行われている。

推しの対象，推すという行動にはその存在に伴う感情があり，その感情の種類や方向性，程度は推す人それぞれである。植田（2018）は「推す」とはアイドルとファンの間の関係性を表す言葉であるとしており，単に「好きになる」「ファンになる」「応援する」といった感覚だけではなく，推しを推すことは感情移入することが含まれているということを述べている。

久保（2022）は推すという行動について「プロジェクション・サイエンス」という概念を用いて説明している。プロジェクションとは自分が作り出した意味，表象を世界に投射し，物理世界と心理世界に重ね合わせる心の働きのことであり（鈴木, 2016），「推し活」には物理的なものに意味をつけるプロジェクションがよく見られ，モノが特別な意味を持つことで当人の世界を豊かにしていくとしている。

また中林・水口（2020）は，ファン心理の視点から，心理的健康に関する質問紙調査を行っている。その結果，ファン対象を持つ場合の方がそうでない場合よりも主観的幸福感の要素である人生に前向きな気持ちが高いことを示し，さらにファンコミュニティを形成し，参加することで居場所感が生じる傾向にあり，それらが心理的健康に良い影響を与えていると考察している。

さらに推し活の中には防衛機制（defense mechanism）が働いていると思われるものがある。防衛機制を基礎付けた Freud（1936）は，防衛を「自我が葛藤に際して役立てる全ての技術を総称」する概念としている。枚田（2021）は，自身の劣等感を補完するために，推しに対して完璧であるべきという思いを抱くようになるのではないかと示唆している。すなわち，推し活のなかでも防衛機制と思われる現象が起きており，防衛機制を通して，推しを推す人々は内的欲求や葛藤を抱えながらも，現実世界でのよりよい適応を試みているのではないかと思われる。

このように，推しを推している人の体験についての研究は徐々に増えてきており，推しを推すということを一つの現象として捉え，推しとは何か，推し対象と本人の間にどのような感情や心理状態が生じてい

るのかという視点での研究がなされてきている。しかしながら，なぜ人々が推しを推すのか，推しを作り出すのか，あるいは推しという存在によって人にどのような心理臨床的変化がもたらされるのかについて言及した研究はない。そこで本研究では①推しが存在する理由を検討すること，②推しが心理臨床的視点からどのような機能を持っているのかを明らかにすることの 2 点を目的とした。

Ⅱ. 方法

研究デザイン　本研究は，半構造化面接を用いた調査研究であった。

研究対象者　本研究では，右に示す 2 つの条件に見合う推しを持つ方 7 名から協力を得た。研究対象者の基本情報を Table 1 に示す。基本情報の内，性別については，研究実施者が生物学的性別に基づき判断した。研究対象者は，研究実施者の知り合いを通じたスノーボールサンプリングを用いて募集を行った。スノーボールサンプリングについて，本研究では事前に推し対象が研究対象者間で異なることで，得られる語りも幅が出ると考えたため，サンプリングの際は推し対象ができるだけ被らないように配慮した。

条件 1

スポーツ・演劇・映画・音楽・アニメ・漫画などの様々な分野において魅力を感じたり，好きで応援したりする人物やキャラクターなどであること

条件 2

推しとはただ受け身的に愛好するだけではなく，その好きな対象のイメージをもとに何か他のものを生み出したり，好きな対象と同じことをしたりといった能動的行動を引き出される対象そのものであること（例えば，好きな対象に特徴的な色を自分のファッションに取り入れる，好きな漫画やアニメの舞台となった土地を巡る，など）

調査時期　2023 年 7 月から 10 月までの間

調査方法　研究開始に先立ち，研究説明文を用いて，研究対象者に十分な説明を行った。そして研究対象者から研究参加に対する同意が得られた後，面接日程の調整を行った。面接は，対面かオンライン（Zoom）かを選択してもらい，対面の場合は鳥取大学大学院医学系研究科臨床心理相談センターの一室にて実施した。

面接開始前に，再度本研究についての説明と倫理的配慮についての説明を行った。また，面接の回答に

Table 1
研究対象者の概要

	性別	年齢	職業	推しとする対象のカテゴリ	ナラティブ中の表記
A	女性	25	文系大学院生	K-pop女性アイドルグループと そのうちの1名	推しA 推しA－１
B	男性	42	公務員	K-pop女性アイドルグループの内、 1名	推しB
C	女性	25	舞台俳優	少年漫画の主人公キャラクター 少年漫画の女性キャラクター モバイルゲームの男性キャラクター 音楽プロジェクト内のグループ	推しC－１ 推しC－２ 推しC－３ 推しC－４
D	男性	23	理系大学院生	小動物型キャラクター　×２	推しD－１ 推しD－２
E	女性	23	無職成人	男性アーティストグループ 日本プロ野球球団	推しE－１ 推しE－２
F	女性	24	会計士	少年漫画作品	推しF
G	女性	23	文系大学院生	日本人男性アイドル	推しG

ついて筆記による記録とボイスレコーダー，もしくはレコーディング機能による録音を行うことへの同意または拒否を確認し，同意を得られた場合についてのみ，記録，録音をした。面接中は，研究対象者の話の流れを妨げないように留意し，必要に応じて質問の順番を変えたり，より詳細な内容を求めたりするなどの柔軟な変更を行った。面接時間は 1 時間から 1 時間半程度であった。

倫理的配慮　本研究は，鳥取大学医学部倫理審査委員会において審査を受け，承認（整理番号：23A016）を得て実施した。研究対象者への説明は，倫理審査を通過した説明文書を用いて行った。研究への参加は自由意志であり，たとえ研究への参加を拒否したとしても，研究対象者に一切不利益は生じないということ，研究への参加を同意した場合であっても，いつでも参加への意思を撤回できるということ，研究で得られた個人情報などのデータは匿名化され，本研究では匿名化された情報を用いることなどを説明文書に記載し，研究対象者からは同意文書への記入あるいは録画された動画内での意思表明によって同意を得た。

調査内容　研究対象者に対して，以下の 4 つの項目について尋ねた。

1）研究対象者の基本情報（年齢，職業）

2）推しの基本情報

「あなたの推しは何・誰ですか」「どのような出会いでしたか」「どのくらいの期間推していますか」など

3）推しのいる生活について

「どのような推し活をしていますか」「推しのいる今と推しのいないときとでどのような違いがありますか」「推しのいる生活はどの程度充足していると感じますか」など

4）推しに対しての考え方について

「あなたにとって推しとはどのような存在ですか」「あなたにはどうして推しがいるのだと思いますか」など

分析方法　本研究では半構造化面接を用いた質的研究を行った。推しに関する体験は，生育歴やパーソナリティなどによって人それぞれであることが推測された。そのため，分析するにあたって，複数の対象者の語りに共通する特徴に基づくとそれぞれの語り手特有の要素が疎かにされる危険性があり，本研究では個別的に分析を行うことが望ましいと考えた。また，分析結果から推測される語り手の体験を考察するためにはその語りが，どのような文脈をもっていて，連続性が維持されているのかを示す必要があると考えた。そこで語り手の全体像や語りの連続性を極力解体せず，一人一人の対象者の語りに基づいてシークエンスを重視し，その中からより転用性の高い知見を探索するために，本研究ではナラティヴ分析を用いることとした。

ナラティヴ分析　面接で得られたデータは，ナラティヴ分析を用いて分析した。ナラティヴ分析の目的とは，「包括的な説明の提示や仮説の生成にはなく，偶発的にみえる出来事からマクロな視座につながる理論的要素を提供すること」にあるとされている（灘光他，2014）。またナラティヴ分析の中でもテーマ分析（Riessman, 2008）は，個別事例にみられる主観的意味の世界を理解することを目的としており，調査対象者の語りについて個人の連続性を維持したり，それぞれの語り手に特有な要素を慎重に扱ったりすることができると考えられた。以上の理由から，本研究ではナラティヴ分析の中でもテーマ分析を用いて分析することとした。

Ⅲ. 結果と考察

本研究では①推しが存在する理由を検討すること，②推しが心理臨床的視点からどのような機能を持っているのかを明らかにすることの２点を目的とし，推しをもつ研究対象者７名の語りをナラティヴ分析によって分析した。研究対象者それぞれの推し対象は多種多様ではあったが，推しが存在する理由は，研究対象者が推しをどのような存在として認識しているかということと類似した語りがみられる場合が多かった。また研究対象者らは，推しのいる自分と，推しのいないときの自分を比較し，様々な変化が生じていたことを語った。そしてその変化をポジティブに捉えている語りが多くみられた。以下，研究対象者らの語りを全体的に俯瞰しながら，人が推しを推す理由についての考察を行う。なお，ナラティヴは［　　］と表示し，（　）は研究者の発言を示すものとする。

（1）推しの位置づけと防衛機制の違い

研究対象者らに対して，推しをどのような存在だと思うかを尋ねたところ，対立する語りがみられた。それは，推しが自身を構成する要素の一部であるとする語りと推しが自分にとって中心であるとする語りである。A さんは推し以外にも興味関心のあるものが複数あり，推しはそれらを含めた人生をより豊かにするもののうちの一つであるといったニュアンスの語りをしていた（Table 2）。

Table 2
A さんのナラティヴ①

62	（Aさんが推し活を始めたのが大体2020年じゃないですか、それまでの生活と今の推しのいる生活を比べて何か思うことありますか？）
63	あ〜、なんかハマる前は私別にそのゲームも好きだし、アニメも好きだし、なんか別にその楽しくないとかそういうことが全くなくて、退屈とかはなくて、むしろ、一人で何か打ち込んで楽しむことが多かったので、で、それがただ単に、なんだろうな、このグッズが出たら毎回買うみたいなものではなかったんですよ、なんだろうな、でも気に入っているゲームシリーズだったら毎回買ってたな、だからその、大きな変化はなくて、単純に私が楽しめるものの中に推しAが入ってきたっていう感じだと思うんですよ、でも、気持ち面で言ったら、多分こんなに何か対象物に対して、可愛いって思ったの柴犬以来だと思うんですよ、なんかはじめてでしたね、なんか音楽がいいとかじゃなくて、この子たちを純粋に応援したいっていうのが初めてで、そこで、あ、これが、そのアイドルを推す人たちの気持ちなんだって理解できました、それがやっぱ大きい差ですかね。

一方で，E さんは推しが軸であると語り，推しのいない生活は考えられないとも語っていた（Table 3）。両者の違いは，推しの位置づけであると捉えることができる。A さんにとって推しは自身の周辺を構成する要素の一つであり，代替性のあるものであるが，E さんにとって推しは自身の軸・中心的存在であり，推しの対象が変わることはあれども，推しの代わりになる存在はないと感じているのではないかと思われる。また，A さんも E さんもほかの語りにて，推しの考え方や言葉を自身に取り込むことをしているという点では似ているようにみえる。

Table 3
E さんのナラティヴ①

22	（大雑把な質問で申し訳ないんですけど、推しってどんな存在ですか?）
23	えっとなんか結構現実で、現実の生活で疲れたり頑張れないってなったり、しんどいなって思ったり、しんどいなって思った時のさっきも言ったように心の拠り所だったり、気分転換だったり、一旦ちょっと動画見たりその音楽聞いたりして、気分上げるとか、あとまた落ち着かせるとか、なんかそういう存在で正直多分推しがいなかったら生きていくのしんどいと思います、私は、私の場合それぐらい、何だろ、軸みたいな感じ、私の中の軸ぐらいの、でも、だから逆に、推しおらん人とか、私も中学以前は、そんな何も考えてへんかったのかもしれないですけど、どうやって生活してるんだろうとか、してたんだろうって思うぐらい、ない生活が考えられない感じ。

しかしながら，神谷（2006）は，防衛機制の「同一化（同一視）」と「取り入れ」は外的対象の属性や機能を獲得するという点で類似しているが，自他の区別がついている状態で行われるのが「同一化（同一視）」であり，自他の区別が未分化なままで行われるのが「取り入れ」であるとしている。これに準ずると，A さんは推しと自分との間に区別がついているため，「同一化（同一視）」が起きており，E さんの場合は推しと自分の境界が曖昧になっており，「取り入れ」が起きているのではないかと思われる。いずれにせよ，A さんや E さんをはじめとして推しを推す中では防衛機制が生じており，防衛機制を通して，潜在的な不安や欲求・葛藤を抱えながらも，現実での適応が試み

られているのではないかと思われる。しかしながら，こうした防衛機制が過度にはたらくことで主体性が損なわれる可能性もあるのではないかと思われる。

（2）ポジティブな影響を供給してくれる存在という認識と態

研究対象者の中で，C さんや G さんは推しに対して癒してくれる存在，支えになってくれる存在というふうに語った（Table 4）。

Table 4
C さんのナラティヴ①

71	（じゃあちょっと、答えずらいと、言葉にするのが難しいかもしれないんですけど、C さんにとって推しってどういう存在ですか）
72	あ、えっと、……楽しませてくれる存在って言ったらいいんですかね……現実を忘れさせてくれる存在ではあります
73	（現実を忘れさせてくれる）
74	…仕事柄どうしてもうまくいかないときとかの方が多いので、そうなると、なんだろう、現実に存在していないからこそ癒してくれるところがあるんです…なんだろうすごく好きな俳優さんとか歌手の方とかいても…全然好きなんですけど、どうしてもなんだろう自分と比べてしまう、そういう部分があって、だから現実に存在している人間をなかなか私は推せないということがあって、自分と重ねてしまうので。どんなに頑張ってもやっぱり運しだいな世界ではあるので、役者の世界って、実力よりも、運と縁。そう考えると、現実に存在していないこの子たちは、なんだろう、まあ、なんでしょう、好きに考える…好きにとらえることができるし、別にこの子達は私を癒そうと思わなくても私は勝手に癒されてるし、私を勇気づけようと思ってなくても、私は勇気をもらっているし、元気づけようなんて思ってもないけど、なんかいてくれるだけで元気になるし、みたいな、そういう存在ですね。

このことから，C さんや G さんが推しからポジティブな影響を享受していたことが伺える。しかしながら，両名のナラティヴの中では，研究対象者らが推しに〇〇されているという表現がみられている。馬場（2020）が，推すということについて「理想や願望が形象として整理された対象を選び出す能動的な行為」であると述べている一方で，久保（2022）は推しの構造について，受け身的に愛好するだけではなく，能動的な行動を起こしているということを言及している。推すという事象を客観的に捉えたとき，推している人たちは能動的であるように思われるが，当の本人たちの主観的な体験は受動態で語られることがある。

（3）内的世界が投射される存在

C さんと D さんは日常的に，推しのグッズを持ち歩いていることを語った。C さんは，アクリル板にキャラクター写真・イラストが印刷された「アクリルスタンド」や，キーホルダーや缶バッジなどをたくさん飾り付けられている「痛バッグ」，自身で推しをモチーフにハンドメイドしたキーホルダーなどを日ごろ持ち歩いており，D さんは推しのぬいぐるみ（ぬい）を持ち歩いており，また学校のデスクの上にも常に飾っていることが語られていた。さらに，この 2 名は持ち歩いたグッズを被写体として行った先々で写真や動画を撮影していることも語っていた。これは「ぬい撮り」と呼ばれる推し活の一つとも言える行為で，久保（2022）はこの行為の中にもプロジェクションが見てとれるとしている。推しをかたどったグッズに投射されるのは推しそのものだけではなく，行った先での楽しいという感情や美味しいものやきれいな景色に感動する自分もグッズに投射されているのではないかとされている。このプロジェクションのはたらきによって，推しを推す人は記録や記憶を思い出として内的世界に保存しているのではないかと思われる。

（4）自分の好きなことの結果としての推し

研究対象者の中で B さんは，推しと出会う以前から元々「人を応援することが好き」「頑張っている人を見るのが好き」という思いがあることを語った（Table 5）。

これを B さんの価値観の一部であると捉えると，たとえば B さんが推しのパフォーマンス動画を観たときに，頑張っている推しの姿をみて，嬉しい気持ちや幸せな気持ちを得ていると考えられる。つまり，推しを推している研究対象者らは，推しを介してポジティブな影響を獲得するために行動しているため，より強く幸福感などを得ることができているのではないかと思われる。

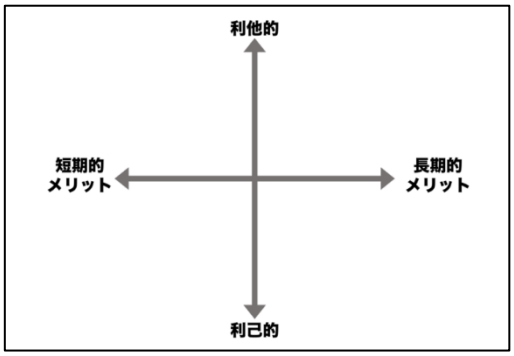
Table 5
B さんのナラティヴ①

24	（なんで応援したいって思うようになるんですかね。）
25	わからんけど。多分それは、何か自分自身がベースとして、何かこう頑張ってる人を応援したいみたいなのは、あるなっていうのは、正直最近、考えてるところで。その仕事をそういうふうに選んでるっていうのも多分あるかなと思うけど。頑張ってる人を応援したいっていう、ベースみたいなのはあるのかなっていうのは。だから、このプロジェクトの後の、ほかのオーディション番組とかも見とったけど、なんか前のプロジェクトから入ってるのもあるけど、ある事務所で苦労して、やり直しているっていうところで応援している子がいたっていう。一貫してやっぱそういうところはあるのかなっていう気がするかな。

（5）金銭感覚の変化

C さん・D さん・E さん・G さんは推しを推す中で，お金の使い方や金銭感覚が変わったということを語った。宮崎（2020）は，推しに関わる消費行動について，その動機に着目した。消費行動の動機を利他的―利己的という縦軸と短期的メリット―長期的メリットという横軸のマトリクス（Figure 1）に布置させた場合，利己的―短期的メリットの象限に当てはまる消費行動を，利他的―長期的メリットのある行動として合理化した語りがみられるということを述べている。このマトリクスにおける利他的とは，推し対象や同じ推しを推すファンといった他者が消費行動となっており，もう一方の利己的とは，行動としては推し対象に関わるものであるが，動機はどちらかといえば，自分自身のためであることを指している。また，短期的メリットとはある消費行動を行うメリットが，一瞬あるいは近い将来に受け取ることができるもので，長期的メリットとは，ある消費行動を行うメリットがある程度未来のことであったり，何度も行動を行う必要があったりするものである。本研究においても，C さんは「推し活は自己満だと思っている」「楽しいものが増えた気持ちになる」と語った後で，「運営にお金を落としたい」と続けていた。このように，推しに関わる消費行動が合理化されることで，消費行動に対する抑制が働きにくくなり，結果として消費行動が促進されている可能性が考えられる。さらには，推しにまつわる行動には，この 2 軸に焦点を当てた両価性が潜在している可能性も考えられる。単に消費行動を合理化しているわけではなく，当事者には実際にどちらの意識も並行して存在しているという捉え方もできるのではないかと思われる。

Figure 1
消費行動の動機のマトリクス（宮崎，2020）



（6）習慣や考え方の変化

研究対象者の中には，お金に関する側面以外での習慣や考え方の変化が生じたことを語った者もいた。C さんは人間関係の中で，来るもの拒まずという状態だったが，推しの存在によって，遊ぶ人を選ぶことや断りたいときは断るなどといった選択肢が増えたことを語った。この語りからは，推しを共通としたコミュニティという人間関係の幅が広がったことや，推

しを推していることを建前に断ることが容易くなったことで，C さんの人間関係における習慣や考え方が変化したことが伺える。また E さんにおいては，推しのライブに行ったときにファンサービスをもらったことをきっかけに「もっと可愛くなりたい」と思うようになり，化粧や服装に気を遣うようになったことが語られ，F さんからは，推し作品を知ったことでより人のことを知ろうとする姿勢が身についたことが語られた。これらの研究対象者らの語りから，推しによって習慣や考え方が変わることがあるということが分かった。

（7）コミュニケーションツールとしての共通言語

A さん・B さん・C さん・D さんは他者とのコミュニケーションの中で変化が生じたということを語った。そしてこれらの研究対象者らは，推しを共通言語とした人間関係を構築しており，それをポジティブな表現で語っていた。井上・上田（2023）は同じ対象を推している人同士がしばしば競争意識あるいは仲間意識をもつことについて，心理的所有感という概念に焦点を当てて研究をした。心理的所有感とは，所有の対象やその一部に対して，「自分のものである」と感じている認知的・感情的状態を指しており（Pierce, Kostova, & Dirks, 2001），井上・上田（2023）の研究では，推しアイドルに対する心理的所有感を心理的一体感（推しを理想として，推しと同じように考え，行動することに喜びを抱く次元）と心理的責任感（推しは自分が育て，人気を高められるように努力しなければならないと考えている次元）という二つの要因から成り立っているとされている。そして，推しに対する心理的一体感の強い人は，推しを中心とした共同体を認識しやすく，自身もその仲間であると感じることが可能になり，一方で推しへの心理的責任感の強い人にとって同じ対象を推している相手は，障害として意識されやすく，対峙しやすい。これら推しに対する心理的所有感の二つの次元は，それぞれが仲間意識ないしは競争意識に影響することが明らかにされている。このことを踏まえると，本研究の研究対象者らは，比較的心理的一体感が強く，同じ対象を推している人同士でコミュニティを築き，仲間としての関係を育んでいたことが推測できる。

（8）人はなぜ推しを推すのか

本研究では，研究対象者それぞれにとっての推しの存在する理由と推しによって生じた変化に焦点を当てた半構造化面接を行ったところ，推しを推している人の心の中では様々な視点で捉え得る事象が生じていることが分かった。以下，上記の考察を踏まえて，人が推しを推す理由に関する仮説を記述する。

本研究における研究対象者らは，推しがどのような存在であるか，自身がなぜ推しを推しているのかという問いに対して語るとき，推しとの間に生じる事象をポジティブに表現をしていた。このことから，研究対象者らは，推しの存在によって自身にポジティブな影響があったことに自覚的であったのではないかと思われる。生じた変化についてネガティブな表現をする研究対象者もいたが，それは推しから供給されるポジティブな影響の末端であり，推しを推すことをやめる理由にはなり得ないのではないかと思われる。推しから享受できるポジティブな影響を自覚できることは，人々が推しを推す理由の一つとして考えられる。

そして，推しという存在によって生じた変化について客観的に捉えたとき，推しを推す研究対象者らには明らかな行動の変容があったことが分かった。推し活という言葉は多種多様の推しに向かう行動を指すが，推しができることはすなわち推し活をすることでもある。推しを推すことで，人々はそれまでしていなかった行動を選択するようになり，その結果，幸福感をはじめとしたポジティブな感情を得られることが分かり，さらに推し活をする，ということが繰り返し生じているのではないかと思われる。

以上のことをまとめると，本研究からは，①推しによってポジティブな影響を享受していると当人が自覚しているため，人々は推しを推す，②人々は推しを推すことで，それまでとは違う行動を選択するようになる，という 2 つの仮説が考えられる。

Ⅳ. 本研究の限界点と今後の展望

本研究の限界点として，一般化が困難であることが挙げられる。本研究では面接に先立ち，推しという概念の定義をし，研究実施者の友人や知り合いを介したスノーボールサンプリングを行うことで，可能

な限り研究対象者らの推しが被らないよう注意を払った。そして，これに伴ってより広い視点で推しという存在にアプローチできるよう注意を払った。しかしながら，推し対象を絞らなかったがゆえに，研究対象者それぞれの語りが個別性の高いものとなってしまったのではないかと思われる。

また，本研究ではナラティヴを用いた質的研究を行った。推しに関する研究は，ここ数年で脚光を浴びるようになってきたこともあり，未だ実証的な研究はほとんど行われていない。本研究も含め，これまで築かれてきた仮設生成志向の研究を土台に，今後は推しという存在が人々の心とどう関わっているのかを科学的に示すことが一つの課題として挙げられる。加えて，本研究では人がなぜ推しを推すのかということをテーマとして研究を進めたが，よりテーマを絞ることで分析結果から得られる考察もより具体性が増し，生成される仮説にも説得力が伴うのではないかと考えられる。

V. 結論

本研究は，推しが存在する理由と推しによって生じる心理臨床的変化について探索的検討を行うことを目的とし，推しを推している研究対象者に対して半構造化面接を行った。その分析結果によると，①推しによってポジティブな影響を享受していると当人が自覚しているため，人々は推しを推す，②人々は推しを推すことで，それまでとは違う行動を選択するようになる，という 2 つの仮説が見出された。

謝辞

本研究を進めるにあたり，インタビュー調査に快くご協力してくださった皆様，そして研究対象者の募集に尽力してくださった皆様に厚く御礼申し上げます。

引用文献

馬場 伸彦（2020）．視覚イメージとしてのアイドル論：「見ること」によって呼び起こされる集合的記憶　甲南女子大学紀要，*56*，47-56.

Freud, A. (1936). *The ego and the mechanisms of defense*. International Universities Press.

枚田 香（2021）．“推し”のメンタルヘルスを守るために私たちができることって？　臨床心理士がアドバイス Retrieved February 21, 2024 from https://www.elle.com/jp/culture/music-art-book/g37684962/mentalhealth-idol-guidelines-210928/?slide=9

井上淳子・上田　泰（2023）．アイドルに対するファンの心理的所有感とその影響について―他のファンへの意識とウェルビーイングへの効果―　マーケティングジャーナル，*43*，18-28.

実用日本語表現辞典（2017）．推し　Retrieved December 22, 2023 from http://www.practical-japanese.com/2017/10/blog-post_44.html

神谷 栄治（2006）．パーソナリティ・アセスメントにおける防衛機制の再検討　中京大学心理学研究科・心理学部紀要，*6*，5-11.

久保（川合）　南海子（2022）．「推し」の科学　プロジェクション・サイエンスとは何か　集英社

宮崎 恵実（2020）．オタクはなぜ貢ぐのか―「推し」にかかわる消費行動の合理化に着目して―　筑波大学博士論文　Retrieved February 21, 2024　from https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/records/57046

灘光 洋子・浅井 亜紀子・小柳 志津（2014）．質的研究法について考える：グラウンデッド・セオリー・アプローチ、ナラティヴ分析、アクションリサーチを中心として　異文化コミュニケーション論集，*12*，67-84.

中林 春海・水口 崇（2020）.ファン心理やその活動と大学生の心理的健康の関係―現代社会におけるファナティックの様態と意義―　Annual Letters of Clinical Psychology in Shinshu, *19*, 33-55.

Pierce, J. L., Kostova, T., & Dirks, K. T. (2001). Toward a theory of psychological ownership in organization. *Academy of Management Review*, *26*, 298-310 https://doi.org/10.2307/259124

Riessman, C. K. (2008). *Narrative methods for the human sciences*. Sage.

鈴木　宏昭（2016）．プロジェクション科学の展望

日本認知科学会第 33 回大会発表論文集, *23*, 20-25.

植田 康孝 (2018). アイドル・エンタテイメント概説アイドルを「推す」「担」行為にみる「ファンダム」 江戸川大学紀要, *29*, 133-153.